

論文

児童養護施設のタグラグビー活動による 児童の自尊感情形成の検証

松 本 充 史

(児童養護施設 天王谷学園)

抄録

児童養護施設におけるタグラグビー活動の日常的・継続的な活動の効果を検証した。自尊感情測定尺度調査をタグラグビーの活動前後で実施し、タグラグビー活動の「自尊感情」形成への効果を検証した。活動前に、児童養護施設の児童7名と本施設の児童が通う小学校の一般家庭の児童12名に自尊感情測定尺度への回答を求め、Mann-Whitney Testを実施した結果、「基本的自尊感情」因子で児童養護施設の児童に低得点傾向が示された。「社会的自尊感情」因子では両者に有意差を認められなかった。3か月間10回の練習と試合の活動の後、児童養護施設の児童に自尊感情測定尺度を実施して前後比較(Wilcoxonの符号付順位和検定)を行った結果、「基本的自尊感情」因子において実施前よりも実施後のほうが高い得点傾向を示した。「社会的自尊感情」因子では実施前後の得点差は有意ではなかった。「自尊感情」を形成する機会に触れることが少なかったと思われる児童養護施設の児童にとって、日常的で継続的な「共有体験」としてのタグラグビー活動が「基本的自尊感情」の向上に貢献できる可能性があると考えられた。タグラグビーは、どの児童でも、今持っている力で参加でき、自分の特性がチームに貢献しているという実感を抱きやすいうえ、安全に実施できる。「基本的自尊感情」の得点向上は、タグラグビー活動による一定の効果を示すものとして捉え、今後も質の高いエビデンスを蓄積することが肝要であると考えられる。

キーワード：児童養護施設、自尊感情、タグラグビー、共有体験

Children's Home self-esteem tag rugby experience sharing

I はじめに

親や家庭と分離されて児童養護施設で養育される児童には、「かつての親子関係で、親からの承認が得られず、自分自身に対する信頼感のみならず、自尊心の成長までも阻害され、自我の成長が十分に達成されなくなっている」(森田, 2006)という傾向が指摘されている。「施設入所児童の自尊心が一般的な家庭で生活する児童よりも有意に低い」(吉田, 2011)といった結果を示す調査研究もあり、児童養護施設における児童

の自尊心の向上は、児童養護施設における支援の責務、急務であると考えられる。

これらの現状を改善する試みとして、須崎・兄井・杉山（2014）は、児童養護施設に入所している児童のキャンプ体験を企図しその効果を検討している。須崎ら（2014）がキャンプ体験前後の児童の自尊感情の変容について検討した結果、自尊感情の向上が確かめられ、その環境要因として挑戦・達成体験、自然との触れ合い体験が正の影響を及ぼすことが示されている。このような挑戦・達成体験を伴う自尊感情向上のための直接体験の意義は大きいですが、須崎らの研究で実施されたキャンプ体験は日常から離れた環境における短期間（4日間）の取り組みであり、長期に渡って日常的に実践することができる挑戦・達成体験を伴う自尊感情向上のための直接体験の実践やその効果検証が求められるところである。

そこで、本研究では、児童養護施設の児童にとって日常的に継続して取り組むことができるスポーツとしてラグビーに着眼することとした。梅園・新井（2013）は、ラグビーが他者との協力関係に基づく居場所づくりに貢献できることを示した。本研究では、ラグビー活動のこのような特性が、個々の自尊感情の醸成にまで貢献するのではないかと考えた。児童養護施設の児童は、一般家庭の児童と比べて、孤立感、不安、葛藤を多く抱いているように見受けられる。肯定的な未来思考を持てなかったり、自分を大切にしようと思う傾向が低かったりする児童も多くみられる。人の精神的支柱であり、社会で在りつづけるための基盤である「自尊感情」（近藤，2013）を高める取り組みとしてのラグビー活動の効果について検討したい。

II 目的

本研究は、児童養護施設の児童が身近に取り組むことができるスポーツであると考えられるラグビーに着目し、ラグビー活動の日常的・継続的な活動の効果を検証する。自尊感情測定尺度調査をラグビーの日常的な継続指導の前後で実施し、比較検証を行うことによって、ラグビー活動の「自尊感情」形成への効果を測定する。挑戦・達成体験と児童間の協力関係の醸成を伴うラグビーの継続的な体験による効果を検証・考察することを研究の目的とする。

III 対象および方法

1. 対象

実践群は、A県B市児童養護施設C学園でラグビー活動に参加している児童12名のうち、自尊感情測定尺度「SOBA-SET」の質問紙調査の対象とできる4年生1名（男子1名）及び5年生6名（男子2名、女子4名）の7名（男子3名、女子4名）である。児童養護施設の児童の自尊感情の特徴を理解するために、ラグビー活動実施前の質問紙調査では、本施設の児童が通う小学校の一般家庭の児童（A県B市立D小学校）の本

施設の児童以外の児童のうち4年生全員7名（男子2名、女子4名）及び5年生全員5名（男子3名、女子2名）の計12名（男子5名、女子6名）にも同時に質問紙調査を依頼した。結果をもとに、児童養護施設の児童と一般家庭の児童とのラグビー活動実施前の自尊感情の高さを統計的に比較する。

2. 倫理的配慮

調査にあたっては、学校の了解を得、PTA役員会において説明したうえで、保護者に紙面で調査への協力を依頼し、了承が得られない場合には質問紙調査への参加を強要しない配慮を行った。その結果、調査への参加について全員が了承し、D小学校の児童全員が調査に参加協力することになった。なお、児童養護施設C学園はD小学校校区にあり、倫理的配慮は他の児童と同様に適応された。施設長の了承を得たうえで、当該児童に対して個人を特定できない方法で結果をまとめることについて口頭で了解を得た。

3. 質問紙調査

近藤（2013）は、ローゼンバーグ(1965)とハーター（1982）の自尊感情尺度をもとに、日本の小・中学生が使用することを念頭に置いて自尊感情測定尺度「SOBA-SET」を作成した。「SOBA-SET」は、絶対的で無条件に自らの存在を認める感情である「基本的自尊感情（BASE）」（6項目）と、他者や社会との比較による相対的な優劣によってうまれる「社会的自尊感情（SOSE）」（6項目）、偏位尺度項目（6項目）の全18項目で構成されている。各質問項目について、「とてもそうおもう」（4点 逆転項目1点）、「そうおもう」（3点 逆転項目2点）、「そうおもわない」（2点 逆転項目3点）、「ぜんぜんそうおもわない」（1点 逆転項目4点）の4件法で回答を求める形式を取り、各因子、理論上の得点範囲は6－24点である。本研究の自尊感情測定では、児童養護施設の児童の課題であると考えられる「基本的自尊感情（Basic Self Esteem: BASE）」と、チーム内競争や対戦相手との勝負によって向上が期待できる「社会的自尊感情（Social Self Esteem: SOSE）」の双方を測定できる「SOBA-SET」を採用することが妥当であると考えた。

本研究における質問紙調査は、プログラム前のX年2月5日とプログラム後X年5月24日の計2回実施した。質問紙（「SOBA-SET」（近藤,2013）および自由記述）を児童に配布し、質問項目を読み上げ、無記名自記式回答を記入させ、調査後直接回収した。所要時間は10分程度であった。

本来はすべての児童にX年5月24日に調査を行い、二要因分散分析によって比較すべきであるが、一般家庭の児童への調査は1度しか許されなかった。そこで、実施前の児童養護施設の児童と一般家庭の児童との得点比較、および実施前後の児童養護施設の児童の得点比較を行い、効果検証するという形式を取った。

4. タグラグビー活動

タグラグビー活動は、X年2月5日の第1回調査後に始め、関西タグラグビーフェスティバル（5月16日）参加を経て第2回調査を実施した5月24日後も継続した。この間、筆者は児童のコーチとして児童間の相互行為の機会を設けることに配慮しつつ、同時に参与観察を行った。タグラグビー活動は、週に1回90分程度、主に放課後の学校開放時間に実施した。

5. 実践と観察の概要

タグラグビー活動の指導記録は、児童の活動の状況、筆者と児童の相互行為、児童同士の相互行為について記述するようにした。特に、児童にとって「自尊感情」の高揚を図る上で必要と思われる環境要因を取り上げ、支援者はそれをどのように共有体験の場であるタグラグビーに取り上げたのか、また、児童の自尊感情形成の実態について示すようにした。活動の概要を以下に示す。

① **オリエンテーション**：「タグラグビーの活動の参加意思確認、タグラグビーを知る」

当初、簡単なルール説明をただけで、「鬼ごっこ」や「しっぽ取り」の感覚でタグラグビーにふれさせた。

① **第1回**：「楕円球にふれる」

新たに参加の意向を示した一般家庭の6年児童2名を加えて第1回練習を行った。ラグビーボールを持って走ることに親しみを持てるようなメニューを取り入れた。鬼ごっこの要領で、ボールを持っている人をタッチしたら交代するというルールから始めた。「3分後にボールを持っていた人に拍手。」と皆から賞賛を受ける機会も設けた。

② **第2回**：「タグをつけてみよう」

タグラグビーは、守りの際、ボールを持った相手のタグをとってプレーを止める。ルールの定着を図った。初めてタグをつけさせたが、児童同士でつけ方を教え合う姿が見られた。2人組でタグを取り合う練習では、児童が話し合い、工夫し合う姿が見られたので、それらを称賛した。

③ **第3~6回**：「試合を通じてタグラグビーの楽しさを知ろう」

楕円球、タグを装着すること、相手からタグをとることに慣れてきた段階で試合の導入を試みた。この時期にはミニゲームを開始した。筆者は「どのような工夫で皆が参加していると感じられるようになるか」と児童に問いかけ、運動が苦手な児童も参加できるよう児童に考えさせるようにし、出てきた意見を受け入れるように心掛けた。児童が一緒に喜び合ったりする姿がみられるようになった。

④ **第7~10回**：「みんながうまくなるための手立てを考えてやってみよう」

試合が近づいていき、個人力の向上、チーム力の向上を目指した上で、自尊感情の高揚を意識するようにした。試合中、筆者は「どういう作戦にしたらいいか」などと

発問を行い、各人の特性に合わせたポジションを児童に考えさせ、児童から出てきた意見を称賛することなどを意図的に行うようにし、実際の活動においても技術の向上などに対して勇気づけと承認を意識した。

⑤ 関西ラグビーフェスティバルへの参加：「他チームとの試合に勝とう」

他チームとの試合を経験した。筆者は児童の自信を支えるような声掛けを心がけるようにし、児童間のやりとりを促すような関わりとそれらへの称賛を意識した。

表1 タグラグビー活動の活動内容の概要

時	目標	活動
オリエンテーション (2月9日)	「タグラグビー」という スポーツを知ろう	・参加意思確認を行う ・タグラグビーを知る(簡 単なゲーム)
第1回(2月10日)	ボールに慣れよう	・楕円球にふれる
第2回(2月17日)	タグをつけてみよう	・タグのつけ方を知る
第3回(2月24日)	試合を通じてタグラグ ビーの楽しさを知ろう	・ルールの確認を行う
第4回(3月3日)		・タグの役割を知る
第5回(3月10日)		・チーム内で役割を決め る
第6回(3月17日)		
第7回(4月14日)	みんながうまくなるた めの手立てを考えてや ってみよう	・ルールの確認を行う
第8回(4月21日)		・チーム内で役割を決め る
第9回(4月28日)		
第10回(5月5日)		・仲間と協同でうまくな るための方法を考える
試 合(5月16日)	他チームとの試合に勝 とう	・話し合いながら作戦を 立てる

Ⅲ 結果 ～自尊感情測定尺度「SOBA-SET」を用いた効果検証～

(1) 実施前の児童養護施設の児童と一般家庭の児童の自尊感情測定尺度の比較

タグラグビー活動実施前に、児童養護施設の児童と一般家庭の児童と自尊感情の差の検討を行うために、自尊感情測定尺度得点について対応のない2群のノンパラメトリック検定であるマン・ホイットニーのU検定(Mann-Whitney U Test)を行った結果(表2)、BASEについては児童養護施設の児童が一般家庭の児童より有意に低い得点傾向($p=.013$)を得た。児童養護施設の児童は、「基本的自尊感情」が一般家庭の児童よりも低いことが示唆される。一方、SOSEについては両者に有意な差を見いだせな

かった ($p=.902$)。

表2 活動実施前の児童養護施設の児童と一般家庭の児童の
自尊感情測定尺度の得点(中央値)の比較

下位項目	児童養護施設 タグラグビー 活動前	一般家庭	Mann-Whitney Test
	中央値	中央値	
BASE	1.5	1.7	.013*
SOSE	1.6	1.6	.902 ^{n.s.}

* $p < .05$

(2) 児童養護施設の児童のタグラグビー指導前後の比較

さらに、タグラグビーが自尊感情の向上にどのような効果をもたらせたかについて、児童養護施設の児童のタグラグビー活動前後において「SOBA-SET」を実施してその効果検証を行った。タグラグビープログラム実施前後での差の検討を行うために自尊感情測定尺度得点について対応のある2群のノンパラメトリック検定であるウィルコクソンの符号付順位和検定(Wilcoxon Signed-rank Test)によって活動前後の得点を比較したところ、BASEについては実施前よりも実施後のほうがやや高い得点傾向($p=.061$)を示していた(表3)。SOSEについては実施前後の得点に有意な差を見いだせなかった($p=.396$)。「基本的自尊感情」についてのみ、タグラグビーの指導前後において得点向上がみられたことが示唆される。

表3 タグラグビー活動実施前後の自尊感情測定尺度の得点(中央値)の変化

下位項目	タグラグビー 活動前	タグラグビー 活動後	漸近有意確率 (両側) (Wilcoxon検定)
	中央値	中央値	
BASE	1.5	1.7	.061*
SOSE	1.6	1.6	.396 ^{n.s.}

* $p < .10$

(3) 児童養護施設の児童のタグラグビー指導前後の個別比較

個別の得点変化(表4)をみると、5年生男子では概ね得点の向上が見られた。一方、5年生女子では4名中2名に向上傾向が見られたものの、2名には向上を見出すことはできなかった。

表4 対象児童の得点分布

学年	性別	SOSE前	SOSE後	得点差	BASE前	BASE後	得点差
4	M	18	16	-2	15	17	+2
5	M	16	19	+3	17	18	+1
5	M	18	21	+3	16	18	+2
5	F	8	11	+3	14	17	+3
5	F	15	15	±0	13	17	+4
5	F	20	17	-3	15	18	+3
5	F	13	13	±0	15	13	-2

IV 考 察

児童養護施設の児童の多くは、「自尊感情」を形成する機会に触れることが少なかったと思われる。本研究において実施された、日常的で継続的な「共有体験」のタグラグビー活動の体験は、児童養護施設の児童の「自尊感情」を向上させる取組のひとつになることが期待された。タグラグビーはすべての児童にとって、初めて出会う球技の体験であり、既に持っている個人の力量だけでは対応し切れない「チームとしての協力」がより求められる要素が含まれている（梅園・新井,2013）。タグラグビー活動実施前に自尊感情測定尺度を用いた質問紙調査の結果では、児童養護施設の児童は一般家庭の児童に比べて「基本的自尊感情」が低いことが示された。この結果は、児童養護施設の児童への自尊感情、特に基本的自尊感情を向上させる取組の必要性を示すものであると思われた。タグラグビー活動が、児童養護施設の児童の自尊感情を向上させることが期待された。

近藤（2007）は、「じっくりと育まれて形成された基本的自尊感情と、競争や努力によって高められる社会的自尊感情という二つの領域をバランスよく育てることが重要」とした。また、近藤（2013）は「自尊感情」を「基本的自尊感情（BASE）」と「社会的自尊感情（SOSE）」の組み合わせによって成り立つと考え、BASEを絶対的で無条件に自らの存在を認める感情、SOSEを他者や社会との比較による相対的な優劣によってうまれる感情であるとしている。本研究では、近藤の自尊感情の捉え方を採用し、タグラグビーによる「基本的自尊感情」と「社会的自尊感情」の変化を考察することとした。

1. タグラグビーの特徴

タグラグビーはボールを持ったまま前に走るだけでゲームに参加することが

でき、鬼ごっこのような感覚で取り組むことができる。攻撃では左右のタッチラインの間に広く開かれたゴールゾーンどこでもボールを置くだけで得点となるためみんなが得点できる可能性が高い。守りでは、相手プレイヤーを追いかけていってしっぽ（タグ）をとれば静止させることができ、視覚的な部分を含めて、運動が苦手な児童であっても他のスポーツよりも集団スポーツを行っているということを実感しやすい。

ラグビー同様、それぞれの競技者が活躍できるポジションを持ちつつ、安全にも配慮されており、しかもルールが簡便であるタグラグビーは、それぞれの児童が持っている力を発揮しながらゲームを楽しむことができる要素を持っている。学年に関係なく、児童がみんなと一緒にプレーできるタグラグビーは、児童に成功感をもたらす体験を提供する場になることが期待できるものである。これらの特徴から、児童のタグラグビー活動は、参加児童全員が共有体験を持ちつつ、自尊感情を形成する個人内プロセスを経る機会を提供するものとなりうると考えた。

筆者は、本研究でタグラグビーの体験を通じて児童養護施設の児童に、共同で成功感を共有できる日常的で継続的な場を提供した。タグラグビーの体験は、児童養護施設の児童がもつ課題である基本的自尊感情の形成にも貢献することが期待される。本研究において、タグラグビーの活動を選択した理由は以下の4点にまとめることができる。

- ① どの児童でも、今、持っている力で参加でき、楽しむことができる。
- ② 適材適所でポジションが存在し、他者と比べるのではなく自分の特性がチームに貢献しているという実感を抱きやすい。
- ③ タグラグビーにこれまで接する機会がある児童は皆無である。すべての児童が新鮮な気持ちで、同じスタートラインから取り組むことができ、話し合いや協力関係を引き出しやすい。
- ④ タグラグビーは、ラグビーのようにタックルを行ったり、身体をぶついたりする接触プレーが禁止されていて安全である。

2. 自尊感情測定尺度「SOBA-SET」を用いた効果検証

タグラグビープログラム実施前後に自尊感情測定尺度を用いた質問紙調査を行った結果、「基本的自尊感情」について、タグラグビーの指導前後において得点向上がみられた。アンケートに記載させた児童の自由記述の内容も、タグラグビーを通じて「自分はできる」「自分は価値がある」という感覚が児童に生まれている可能性を支持する結果を読み取ることができる。タグラグビーの練習プロセスでは、筆者と児童、児童同士の関わりの中でさまざまな自尊感情の向上につながる体験が見られたと思われる。

但し、プログラムに参加していない一般家庭の児童に対して、実施後という同じ時期に質問紙調査を行っていないという事実からは、効果を十分に測定できていないと

いう懸念が残される。例えば、学校や施設の生活の場面で自尊感情が養われていたことも考えられる。しかし、本研究においては、ラグビー活動を通じて自尊感情を向上させることを主眼に置いた取り組みを進めてきており、BASEの得点向上傾向は、ラグビー活動による一定の効果を示すものであると考えて考察を進めたい。

(1) 「基本的自尊感情測定尺度 (BASE)」の得点変化

「基本的自尊感情 (BASE)」では、児童養護施設の児童が一般家庭の児童よりも低い得点傾向を示していた。幼少期から親と分離された児童の多くは、「基本的自尊感情」を育てていくことが難しい環境にあり、基本的信頼感や無条件の愛情を相手から感じたり、抱いたりする経験が少なかったことの現れであると考えられる。児童養護施設での生活によって、児童の自尊感情の育成が進められることが望まれるものの、生きていくうえで必要な基本的な自尊感情であるBASEの育成にはある程度限界がある場合が多いと考えられる。その中で、本研究のラグビー活動の取り組みによる日常的で継続的なかわりを通じて得点向上の傾向を見いだせたことは意味深い。但し、今回の結果では十分な有意差を得るまでには至らなかった。今後、さらに得点向上を促すことができるよう、実践を見直し、内容をより充実させて実践を継続していくことが望まれる。

井上(1992)は、自尊感情を「自分を非常によい (very good)」と「自分をこれでよい (good enough)」と考える2つの側面から考察し、「自尊感情が高い」状態を「このままでよい (good enough)」と感ずることであるとした。「必ずしも自分を他の人々よりもよりよいと考えているわけでもなく、また悪いと考えるわけでもなく、成長や改善の期待と限界を知っている」とするgood enoughのとらえ方は重要であり、本研究においても重要な概念であると考えられる。ラグビーは、すべての競技者が協力することが求められる競技であり、good enoughを体験できる場を作り出しやすい。今後もラグビー活動を継続することによって、基本的自尊感情がより向上することにつながる活動をめざしたい。

(2) 社会的自尊感情測定尺度 (SOSE) の得点変化

ラグビー活動を実施する前の調査では、児童養護施設の児童と一般家庭の児童との間で「社会的自尊感情 (SOSE)」については両者に有意な差を見いだせなかった。本児童養護施設に関しては、社会的自尊感情は他の児童との間に差はないと考えられる。一方で、ラグビーのプログラムを経験した児童養護施設の児童にもSOSEに有意な得点向上はみられなかった。この結果は、ラグビー活動の指導によって社会的自尊感情が向上しなかったことを示すものである。

「自尊感情」は、個々の内的な基準からだけでなく、他者関係における社会的な側面から捉えることもまた重要である。児童養護施設の職員は、様々な工夫を凝らして、「子ども同士の関係にも適切に働きかける」(厚生労働省, 2015)ことが求められている。

子どもは、「ぶつかりあい、助け合い、協力し合うといった体験を通して他者を信頼する気持ちが芽生え、社会性や協調性を身につけていく」(厚生労働省, 2015)のであり、児童の成長の過程として、「他者」や「社会」を意識していくこともまた重要である。

ラグビーは、競技者全員が役割を意識し、時に競い合いながら個の能力を上げていかなければならない競技である。指導に際しては、チームメイトと協力しあいながらチームとして目的を達成することについて児童に考えさせるよう指導を続けているものの、まだ個々の取り組みの域を出ていないという結果であると思われる。今後、チームがそれぞれの役割をより意識し関係性を深めていくこと、児童が他者をより意識することができるような指導の方向性をより進めていくことが望まれていると思われる。BASE と SOSE がバランスよく育むことができるよう継続して取り組んでいくことが肝要であると考えられる。

(3) 個別変化

個別の得点変化(表4)をみると、高学年男子で概ね得点の向上が見られた。ラグビー活動によって、自尊感情の向上を見出すことができたことは、個々の取り組みの様子からも妥当であると思われる。5年生女子では4名中2名に向上傾向が見られたものの、2名には向上を見出すことはできなかった。運動の得手不得手による取り組みの差などの要因が考えられる。今後の指導の工夫によって、運動が苦手な児童がより参加意欲を高めることができるような取り組みの工夫を進める必要がある。

3. 「共有体験」を通じた「自尊感情」の向上

近藤(2013)は自尊感情の形成の過程において「共有体験」を最重要視している。児童養護施設の児童の「自尊感情」に着目すると、幼少期に重要な他者(親、親に代わる養育者)との共有体験が少ないことが考えられ、愛着によって培われる「人間形成において大切な根の部分」が欠落してしまっていることが懸念される。安心できる場に依存し、外界に好奇心をもって自立していくアタッチメントを基にした「依存と自立のサイクル」の展開は、親との離別を経験している児童養護施設の児童にとって極めて深刻な課題になっている。

これらの体験を児童期に入った後に少しでも取り戻すために、ラグビーの実践を通じた日常的、継続的な「自己評価」、「自己肯定感」の向上への取り組みを進めることは意義深い活動であると考えられる。活動の中で、他者から賞賛や指摘の言葉を受ける機会を得ながら、人に依存したり人から受け入れられたりする体験を重ねることによって、挑戦・達成体験と児童間の協力関係の醸成が進められ、「依存と自立のサイクル」の一部を体験しなおすことが期待できるのではないかと考えるからである。

本活動においては、親しみを持てるようなメニューを取り入れ、皆から賞賛を受ける機会を設けたり、児童間で教え合い話し合う機会を設けたりして自尊感情の高揚を

図った。児童と一緒に喜び合う姿もみられるようになった。今後もタグラグビーの実践を通じて、児童自身が「自尊感情」や「挑戦しようとする意欲」を高め、それらを「自己受容感」の向上に繋げていくことが望まれる。

V おわりに

児童養護施設の児童のタグラグビー活動の効果検証を行った。挑戦・達成体験と児童間の協力関係の醸成を伴うタグラグビー活動の継続的な体験によって、児童の自尊感情の向上に一定の効果を見出すことができたものの、本研究ではその課題や限界も示されたと思われる。児童養護施設の児童は、その生活の時間の大半を「施設」で過ごす。普段の施設生活場面でも自尊感情を育ていけるような体制づくり、関わっている大人の創意工夫が必要であると思われる。今回の結果をもとに、児童へのかかわりをさらに総合的な取り組みとして進めていくことが必要であるとする。

謝辞：本研究にご協力していただいた皆様、また本研究の実施にあたりご指導いただいた神戸親和女子大学の島剛先生に心より感謝申し上げます。

追記：本研究は、2016年2月28日、日本児童養護実践学会第8回研究大会（大阪成蹊短期大学）において発表した内容を加筆、修正したものである。

引用・参考文献

- Harter, S. (1982) The perceived competence scales for children, *Child Development* 53, 87-97.
- 井上祥治 (1992) 「セルフ・エスティームの測定法とその応用」 遠藤辰雄・井上祥治・蘭 千壽編 『セルフ・エスティームの心理学』 ナカニシヤ出版 26-27
- 近藤卓 (2007) 「生きる力」を支える自尊感情 『児童心理』 61(10);43-47
- 近藤卓 (2010) 『自尊感情と共有体験の心理学』 金子書房 1-9
- 近藤卓 (2013) 『子どもの自尊感情をどう育てるか：そばセット (SOBA-SET) で自尊感情を測る』 ほんの森出版 10-16, 45-47, 57-63
- 厚生労働省 (2015) 『児童養護施設運営ハンドブック』 「養育のあり方の基本」 26
- 森田善治 (2006) 『児童養護施設と被虐待児』 創元社 34-38
- Rosenberg, M. (1965) *Society and the Adolescent Self-Image*. Princeton: Princeton University Press
- 須崎康臣・兄井彰・杉山佳生 (2014) キャンプ体験が児童養護施設入所児童のコーピングと自尊感情に及ぼす影響 『健康科学』 第36号12-18
- 梅園晋吾・新井肇 (2013) 不登校予防のための学級における「居場所」づくりに関

する実践的研究—タグラグビーによる相互作用達成感の獲得を目指して— 『生徒指導研究』23/24 兵庫教育大学生徒指導研究会 3-15

吉田絵美（2011）一般家庭児童と施設入所児童における自尊心の差異について 親和女子大学『児童教育学研究』第30号『教育専攻科紀要』第15号 173-180

Investigation of the effect of tag rugby activities on self-esteem formation in elementary school students in a children's home.

This paper investigates the effects of tag rugby activities over a 3-month period in elementary school children living in a children's home. Carrying out a survey using scaled measurement, the author has looked at the effects of tag rugby activities on the formation of self-esteem. Prior to the 3-month period, self-esteem of 7 residents from the children's home, and that of a control group consisting of 12 children attending the same elementary school, was measured, using scaled measurement. Comparing both groups, the calculation of the independent Mann-Whitney Test showed for the factor of basic self-esteem a lower score for the children's home group. For the social self-esteem factor, a significant difference between the two groups could not be established. After the activities over the 3-month period, consisting of 10 training sessions and a final match, basic self-esteem for the students from the children's home was measured again and compared to the scores prior to the intervention, using the Wilcoxon signed rank sum test, which showed a significant improvement of scores.

Again, for the factor of social self-esteem no significant differences in scores before and after the 3-month period could be established. It can be concluded that for the residents of the children's home, who owing to their domestic backgrounds have had only few opportunities to build up basic self-esteem, the shared experience of the routine of the tag rugby activities proved conducive to developing this quality. What makes tag rugby special is the fact that the children can feel safe because they have a high degree of control over the game. Moreover, it is easy for the children to gain a sense of accomplishment because everyone can contribute with their unique strengths to their team's performance, without the necessity of prior training. In conclusion, the rise in basic self-esteem can be interpreted in part as a result of the tag rugby activities. In the future it is necessary to accumulate high-quality evidence.